

# 北九州市民の会ニュース

初代門司港駅跡遺構と複合公共施設  
初めての市民説明会に130人が参加

## 記録保存ではなく現地保存し史跡指定を



質問する門司区永黒の土井さん（西日本新聞より）



説明資料はなく画面で説明の片山副市長

北九州市は5月29日、初代門司港駅跡（旧門司駅）の鉄道関連遺構が見つかった場所ですめている、門司港複合公共施設の整備計画に関する説明会を門司区の門司生涯学習センターで開催し、約130人が参加しました。市は一貫して遺構を切り取り壊して施設整備を強行する方針を示しました。

遺構が見つかって初めての市民説明会でしたが、14時から会場受付がはじまり氏名を記入したあと番号札による席が指定されました。また会場からの質問は「slido（スライド）アプリ」を使ってのスマホ送信による質問とアンケート用紙への記入する方式で質問と回答を行うことを司会者（民間）が説明をしました。

これに対して「市民の声を直接聞くのではないのか」「挙手による質問を市は受けるべき」などの声が相次ぐ中、結局、挙手による質疑や意見聴衆も行われました。

市は片山副市長から、複合公共施設の建設事業を急ぐ理由に門司区役所の建て替えが他区と比べて遅れていることを強調し、上村都市戦略局長は複合施設の施設内容を紹介。遺構関連について井上都市ブランド創造局長が建設費は122億5千万円と当初試算の1.5倍に膨れ、遺構を一部残す場合は200億円～250億円となる試算結果を示しましたが、文化財的価値についての説明は全くありませんでした。

参加者から「遺構を残して公共施設を2階以上に作れないか」、「複合型にこだわる必要があるのか。門司港駅はレトロの象徴のようなところ。その隣に近代的な施設は違和感。古きを残す、既存の建物の耐震化とカリフォルム、リノベーションでどうにかならないのだろうか」「遺構の価値について説明がないのはなぜか？」など、遺構保存を求める声が多数をしめる中、一方で「施設の建設を進めてほしい」、「今まで積み上げてきたものを無にしないで」などの早期建設を求める意見がスクリーンに表示されました。質問は191件のほり、司会者が読み上げるだけで多くの時間を要しました。当初1時間の予定が2時間を超える市民説明会となりました。

説明会の様子は後日、YouTubeで放映する予定。また、市民説明会は現在門司区の各校区自治会を中心に行われていますが、役員への説明会になっています。市民参加の説明会を広く求め、取り組みを強めていきたいと思います。

5月21日北九州市に対して、11の学術団体が合同提出した要望書を北九州市は真摯に受けとめ関係団体と協議を行うべきです。また、記録保存のための発掘ではなく史跡指定をめざす重要遺跡確認調査を行うことを求めていきたいと思います。

（要望書は裏面）

2024 年 5 月 21 日

文部科学大臣	盛山正仁 様
文化庁長官	都倉俊一 様
福岡県知事	服部誠太郎 様
福岡県教育委員会教育長	寺崎雅巳 様
北九州市長	武内和久 様
北九州市議会議長	田中常郎 様
北九州市教育委員会教育長	田島裕美 様

初代門司駅遺構の保存を求める 11 学会合同要望書

九州近現代考古学談話会 九州考古学会 九州産業遺産研究会 建築史学会  
 考古学研究会 産業遺産学会 鉄道史学会 都市史学会 日本イコモス国内委員会  
 日本考古学協会 文化財保存全国協議会

北九州市で発見された初代門司駅関連遺構に関し私たち文化遺産に関わる 11 の学術研究団体（以下、「11 学会」という）は深い関心を寄せ、既に 11 学会から保存要望書を提出するなどしているところである。この遺構は、地域史を超え、日本史、アジア史、世界史の視点から考古学、都市史、鉄道史、産業史、建築、土木などの幅広い領域に関わる特筆すべき価値を有していますが、それにもかかわらず、その価値はいまだ十分に理解を得られてはいません。したがって、このたび改めて合同でその価値を申し述べ、遺構の保存を要望することといたしました。

私たちは初代門司駅遺構の価値を以下のように認識しています。  
 門司の歴史的意義は、二つの近代インフラである港湾と鉄道が明治 24 年（1891）にまったく新しく、そして同時に建設されたことにあります。  
 門司は当初、港湾機能を持っていませんでしたが、明治 22 年（1889）に設立された門司築港会社が浚渫・埋立をおこなって、明治 24 年（1891）に近代港湾を整備しました。この過程には渋沢栄一などの資本家の参画がありました。  
 築港と平行して明治 24 年（1891）、当時の日本における代表的な私鉄であった九州鉄道の博多-門司間の開通にともなって門司駅（初代）が設置されました。これによって、陸上と海上交通の一大結節点としての門司が誕生することになるのです。  
 海外との玄関口となった関門海峡には、北前船の寄港地であった下関港と、普後に筑豊炭田という石炭の一大供給地を抱えた門司港の両港が、特別輸出港や大陸との定期航路の寄港地に指定され、国際港湾都市として一躍注目を集めはじめました。  
 鉄道は産炭地から直結して石炭を門司へ運び、それらは阪神地区や東南アジアへと輸出されました。

明治 34 年（1901）に山陽鉄道が対岸の馬関（下関）まで達し、同鉄道の連絡線が関門航路を開設すると、全国的な鉄道ネットワークの拠点としての門司の重要性はさらに高まりました。

造成された門司の市街地には三井物産・三菱合資・大阪商船・日本郵船など、当時の日本を代表する企業の支店・出張所がたち並ぶようになりました。門司はまさにわが国の典型的な近代都市のモデルとなったのです。

今回、発掘で姿をあらわした遺構は、上記の近代海峡都市門司の誕生の瞬間を余すことなく伝えています。①先行する都市集積のなかった場所において、港湾と鉄道という近代インフラを直結するかたちで成立した近代都市として、②日本はもとより東アジア、さらには世界につながる海峡都市として、この二つの局面を示す実物がほぼ完全なかたちで地面の下に残されていたことはまさに奇跡と言わざるを得ません。このかけがえのない遺構は北九州市にとどまらず、日本さらには東アジア、世界の近代に接続していく世界的な価値を有する遺産なのです。

さらに述べれば、今回発掘調査された場所の周辺には、初代～二代門司駅の諸施設遺構が埋蔵されていることが推察されます。将来的に発掘が進めば初代門司駅的全貌が明らかになり、ひいては日本における近代都市の先駆である門司がどのように構想・計画されたかが解明される可能性を多に秘めています。

遺構群が保存された暁には、日本のモデルの近代都市の誕生を示す物証として国史跡に指定される可能性も有すると考えます。さらに、日本各地の他都市の近代交通遺構と一体的に、日本の初期鉄道遺産として世界文化遺産として推薦するに値するものとも考えます。

以上を踏まえ、私たち 11 学会は以下を要望します。

1. 近代日本史及び世界史において特筆すべき価値を有し、重要遺構である初代門司駅遺構を、現在及び将来の市民・国民・全人類が享受できるよう、現地で全面的に保存すること。
2. そのために、今後実施する発掘調査を、記録保存のための行政発掘ではなく、史跡指定を目指した学術調査（重要遺跡確認調査）へと切り替えるべく、北九州市、福岡県、文化庁が協議をすること。このための学術委員会を設置すること。
3. 初代および二代門司駅に関連する建築・構造物が存在していたと考えられる区域を広く、埋蔵文化財包蔵地として指定すること。

日本そして世界の宝である初代門司駅遺構の学術調査、保存活用の際には、私たち 11 学会も最大限の協力を所存ですので、以上のことに宜しくご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

本要望書に対するご回答は 2024 年 6 月 3 日までに、下記へいただけますと幸いです。



## 福岡県自治体問題研究所 第 47 回総会 イスラエルの ガザ虐殺に迫る 木村牧師が記念講演

早良市民センターで 6 月 1 日に開催された研究所の第 47 回総会は、「イスラエルとパレスチナ問題を考える・戦争と平和をめぐる歴史的局面にあたって」をテーマにした木村公一牧師（神学博士・政治神学）の記念講演をめぐり、開会 30 分前から参加者が集まり始め、大変盛会でした。

ガザでのイスラエルの蛮行がなぜ起きているか、長い研究からもたらされた、詳細なレジメ

をもとに、現代史の闇に迫った、充実した内容でした。

第 1 部記念講演は、研究所のホームページ、ユーチューブで、全容が公開されています。

第 2 部総会（16:00～17:00）では、第 1 号議案（2023 年度事業報告と 2024 年度事業計画）、第 2 号議案（2023 年度決算と 2024 年度予算）が承認されました。